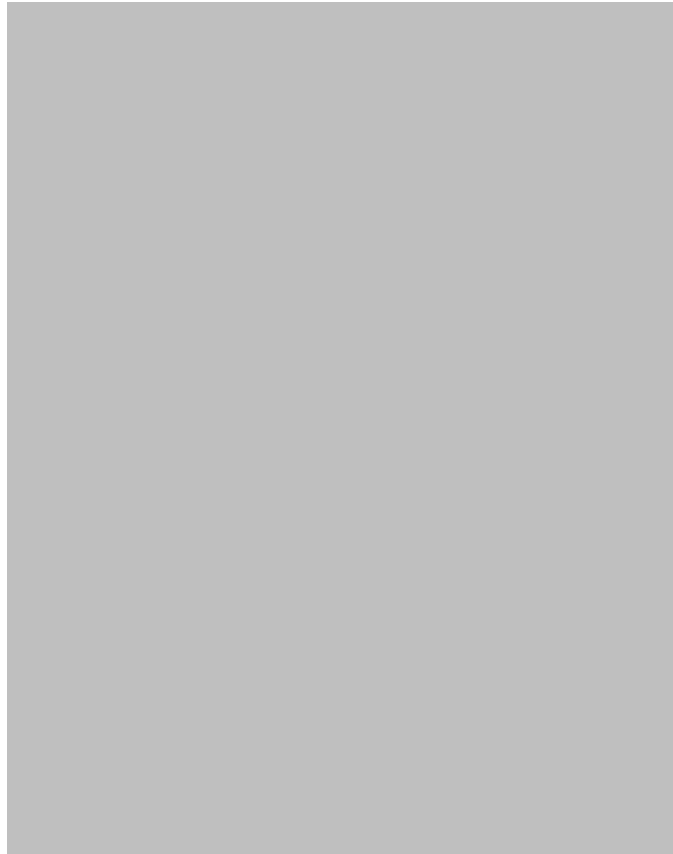


## 栗木達介

### 《黄鱗文卷弁花器》



#### 栗

木達介は、愛知県瀬戸市の陶家に

生まれ、京都市立美術大学で

富本憲吉や清水裕詞に学びました。卒業

後は瀬戸で作家活動に入り、オブジェや

自由な表現をうたつて現代工芸が昂揚す

るなか、朝日陶芸展や中日国際陶芸展、

日展等で大賞の受賞を次々と重ね、まさ

に陶芸界の次代を担う作家として一躍台

頭しました。一九八〇年以降は個展を通

じて「膨らみと窪み」「傾き」「曲がり」と

いう形の基本形態をとらえ、独特の銀彩

上絵の帯模様を装飾を形と融合させた、

いうなら器物とオブジェとの狭間にある

新たな陶の形態を構築しました。自らの

造形哲学を次々と実践して現代陶芸に対

する問題意識を提示し続け、「銀緑彩文

陶」や「銀紅彩地紋陶」など気品のある清

新な造形を展開し、現代陶芸の鬼才と呼

ばれました。

本作品は、七年越しの個展となった

一九九一年の東京・赤坂グリーンギャラ

リーで発表された黄鱗文の「卷弁陶」シ

リーズで、わずかに十一点のうちの一つで

す。成形の技法や形と装飾の結びつきを

再認識しつつ、板状の粘土の面体一枚を

巻き込むようにした「卷弁」と、二枚の面

体を合わせた「合弁」、そして三枚の面体

をやや複雑に組み合わせた「組弁」の形

体シリーズが構想され、そこに見出され

た素型をもとに手びねりで簡明かつ新創

の造形が生みだされています。器胎表面

には、土の地肌を型紙でマスキングしな

がら、蝶の鱗粉模様のような鱗状の銀彩

模様が施され、黄色く塗られています。

その帯状の模様は、広から狭小へと幅を

変じながら、各々の形体に添うように曲

面を美しく覆っています。花器の口縁か

ら外側面へと伸びる稜線と曲面とがつく

る形は、既存の陶芸に発しない、純粹に

栗木自身が思考を深めた陶の論理に即し

たものです。なお、この「卷弁陶」シリー

ズの制作は、五年後に満を持した個展で

発表される、いうなら栗木の陶の造形思

考のすべてを結集してたどり着いた、「形

を離れる帯模様」と「組帯壺」のシリー

ズで完結することとなります。

なお栗木達介は、二〇一五年の京都及

び東京国立近代美術館で開催された個展

の前後頃から国内に留まらず国外でも高

く評価されていますが、しかしその生涯で

発表した作品はせいぜい数百点という、き

わめて寡作の陶芸家でした。当館では、栗

木自身の協力があって、脚光を浴びた早期

のオブジェ大作《這行する輪態》をはじめ、

一九八〇年以降の個展出品作のうちから

《銀彩紅地文壺》のほか重要な作品五点を

収蔵していました。ここに紹介した《黄鱗

文卷弁花器》を含む各個展の出品作四点

の寄贈を受け、コレクションは大いに充実

しました。（工芸課主任研究員 諸山正則）

栗木達介(1943-2013)  
《黄鱗文卷弁花器》

1991年  
陶器  
高さ36.5、幅32.3、奥行30.0cm  
平成27年度寄贈  
撮影：アローアートワークス